

地域資源の魅力を極め、地方創生の礎に 「インフラツーリズムによる地域活性化の価値」

1. はじめに

政府が掲げる「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の重点戦略の一つに観光による交流人口の拡大による地域活性化がある。我が国の最大の課題ともいえる少子高齢化問題、2018年3月現在の65歳以上の高齢者はすでに27.1%、2060年には総人口の約40%が65歳以上になる見通しである。さらに現在、約8,200万人いる15歳以上65歳未満の生産年齢人口は2060年には現在の半分の約4,400万人近くまで減少するとされている。

すなわち国力が減退した今、観光による消費額を倍増させ日本経済再生の大きなカギとしたい考えだ。そのためには従来と異なる視点で新たな観光コンテンツの開発、整備が不可欠となる。今回は注目を集める「生活文化観光」や「インフラツーリズム」をベースに観光による地域創生の可能性を考えたい。

2. 政府の観光ビジョン

2017年3月に策定された政府の「明日の日本を支える観光ビジョン」では、2020年に訪日外国人旅行者数を4,000万人、訪日外国人旅行消費額を8兆円とし、さらには2030年にそれぞれ6,000万人、15兆円とすることを目標としている。2017年における訪日外国人旅行者数は、2,869万人に達し、旅行消費額も4兆4千億円まで拡大するなど、観光は我が国の経済を支える産業へと成長した。

3. 「生活文化観光」と「インフラツーリズム」の可能性

観光産業が今後我が国を支える基幹産業として

本当に発展していくためには、山積する様々な課題を解決しなければならない。特に重要になるのは価値観の多様化が進む現在、観光客が求める旅のスタイルも変化し、日本人の国内観光客も外国からのインバウンド観光客も同様に従来の「団体・周遊型」の旅行形態から「体験・滞在・交流型」へと旅の楽しみ方が変化している。観光による地域活性化を考える際に、大切になるのは従来観光資源とは思えなかったその土地に眠る資源（方言やその土地独自のしきたり等）を再発見し、地域の生活文化を観光資源に磨き上げるいわゆる「生活文化観光」だ。またこれと相俟って新たに注目を集めているのが、社会インフラを観光資源として活用する「インフラツーリズム」の新たな可能性である。インフラには様々なドラマがある。その土地に誕生した歴史や理由を物語にできる宝庫であり、まさしくわかり易い「生活文化観光」の拠点となりうる。

わかり易い事例としては筆者が2年前から応援している群馬県のハッ場ダムを拠点としたインフラツーリズムにより地域活性化の成功事例を紹介する。

4. 群馬県ハッ場ダムをブランド化した「やんばツアーズ」による地域活性化

ハッ場ダムは建設を進めたい国と地元反対派の方々との壮絶な戦い、さらに民主党政権によるダム建設の中止などまさしく歴史や政治に翻弄された65年間のドラマがぎっしり詰まっている。

そのハッ場ダムも2019年度にいよいよ完成を迎える予定である。ダム完成後は国土交通省のハッ場ダム工事事務所は解散することになり、地元はまさしく地域の自立に迫られていた。そこで

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授(内閣府地域活性化伝道師)

しの はら
篠原

やすし
靖



ハッ場ダムを観光資源として活用するための課題を国や地元の若手の方々と真剣に協議し、ハッ場ダムのツアーブランド「やんばツアーズ」を完成させた。「やんばツアーズ」は日本一のインフラツーリズムを合言葉に日本初となるダムと地域観光を同時にご案内するやんばコンシェルジュの育成を行い、一般観光客には難しく馴染みにくいダムの案内を楽しく、わかり易く伝える仕組みを確立した。さらに画一化されていたダム観光の見学メニューも工夫次第で様々な「顧客価値」が生まれるものだ。先が見学対象を「団体」と「個人」の2つに分類し、それぞれ目的別に見学するツアー内容を検討し合計10本の新たなコンセプトのツアーメニューを開発した。例えば水没する川原湯温泉は代替地で宿の営業を開始しているが、闇に浮かび上がる夜間工事をダム観光の素材とし、地域に生息するホタル狩りをセットし宿泊を促進させる「吾妻渓谷のホタル観賞と夜景ダム見学ツアー」、観光客が激減する真冬対策では樹木を凍らせ人口樹氷をつくり、さらに夜にはライトアップを行うことで川原湯温泉の宿泊稼働を上げる作戦、「真冬の新名物・やんばの樹氷と夜のダム見学ツアー」、さらには訪日外国人用に「YANNBA・INBOUNDTOUR」を開発、日本のダム建設の技術を全世界に誇り、日本の治水対策をPRするツアーなど楽しい客層別に様々な企画を整備した。現在ではハッ場ダム自体が旅行目的となり全国からのバスツアーや個人旅行者などでハッ場ダムは大変な賑わいを見せている。

ちなみに2年前は約5千名であった年間のダム見学者は、今では何と年間5万人が訪問する群馬県内でも有力な観光コンテンツに成長した。

またこの秋からは地元の川原湯温泉の若き経営

者たちが自らマイクを握り、地元の歴史や生活文化を語りながらダムを案内する有料のガイドツアーや地元の道の駅やレストラン、さらには酒蔵と提携したスタンプラリーの仕組みなどダムに訪れた観光客を地元の観光消費と繋ぐ新たなビジネスモデルも確立されてきた。

この他にも筆者が関り推進している熊本県南阿蘇村に建設中の九州地方整備局の「立野ダム」を舞台にしたインフラツーリズムにも注目願いたい。阿蘇の噴火から形成された世界有数の大カルデラや立野峡谷の柱状節理などを「阿蘇ユネスコ世界ジオパークガイド協会」の皆さんのご協力でご案内いただく「インフラツーリズム」と「ジオツーリズム」を融合させた「ジオ・インフラツアー」を開発中で楽しく地元の神話や生活文化を伝えるガイド手法の研究や南阿蘇鉄道のトロッコ列車と立野ダムを組み合わせた新たな企画の開発などを、産官学民連携（旅行会社・大学・南阿蘇村・国土交通省・地元の皆様）で共同研究している。そしていよいよこの秋から立野ダムをNHKの人気番組「ブラタモリ」風にご案内する新たなインフラツアーが日本航空系の旅行会社であるJALパックから新発売される。

5. まとめ

インフラは言うまでもなく国民生活や経済活動の基盤であり、安心・安全な暮らしを守る礎でもある。しかし、インフラの価値と存在理由はそれだけなのか、今回ご紹介したようなインフラの価値を地域の観光資源として最大化する先進的な取り組みも行われている現在、我が国の観光立国の推進と地方活性化の要として全国のインフラを観光の視点で活用する意義を提言したい。